

ベルグソンとブルーストに関する一試論

山 本 徹

序 文

今井仙一氏著『ベルグソン哲学入門』（創元文庫、昭和二十八年）の巻末の、安井源治氏が書いておられる「解説」のなかに、次のような記述がある。

「週刊文芸紙『レ・ヌーヴェル・リテレル』が二十世紀の半ばに当る年を記念して、フランスの作家・大学教授・画家・学者など二百人の知識人に依頼して、十人の代表的な今世紀の人物を選ばせたことがある。その結果は次のようなものであった。

アインシュタイン	七〇%
ベルグソン	六五
ブルースト	六〇
ドビュッシー	六〇
ジイド	五八
ヴァレリー	五六
ド・ブローイ	五六
フロイド	五三
ピカソ	五三

クロードル

五二

アンケートの結果をここに再び掲載させて頂いた理由は二つある。一つは、前記の著書が現在では絶版になっていて、一般に読みがたくなっているためであり、他の一つは、このアンケートの結果が、二十世紀におけるフランスの思想や文学に強い関心を寄せている者にとって、注目すべき参考資料の一つになると思えたがためである。少くとも右に掲げた表から判断する限り、一見して明らかのように、二十世紀の前半におけるフランスの哲学の分野においてはベルグソンが、そうして小説の分野においてはブルーストが、夫々最も高い評価を、フランス本国において受けているということが出来るであろう。小論における目的は、ベルグソンとブルーストの間に見られる影響関係についての若干の考察を、出来る限り両者の残した著作に即しつつ、展開させてみることにある。本題に入る前に、論を進めて行く上で、好都合であると思えるので、この二人の人物の簡単な著作発刊年代表を書いておきたいと思う。

アンリ・ベルグソン

一八五九年十月十八日パリに生まる。

一八八九年 『時間と自由』

一八九六年 『物質と記憶』

一九〇〇年 『笑い』

一九〇七年 『創造的進化』

一九一九年 『精神のエネルギー』

一九二二年 『持続と同時性』

一九三二年 『道徳と宗教の二源泉』

一九三四年 『思想と動くもの』

一九四一年一月四日 パリに没す。

マルセル・ブルースト

一八七一年七月十日 パリに生まる。

一八九六年 『楽しみと日々』

一九〇四年 ジョン・ラスキン著『アミアンの聖堂』の翻訳を出版。

一九一三年 『失われた時を求めて』第一巻「スワン家の方へ」

一九一八年 第二巻「花咲く乙女たちの蔭に」

一九一九年 『模作と雑録』

一九二二年 第三巻「ゲルマントのほう」

一九二二年 第四巻「ソドムとゴモラ」

右同年十一月十八日 パリに没す。

一九二三年 第五巻「囚われの女」

一九二五年 第六巻「逃げ去る女」

一九二七年 第七巻「見いだされた時」

右同年 『クロニク』

一九五二年 『ジャン・サントウイユ』

一九五四年 『サントーブーヴに反駁する』

1

ブルーストをベルグソンとの関連において眺める視覚を最初に提出したのは、文芸評論家ではなく、文学史家でもなかった。では誰か。実を言う和外でもない、それはブルースト自身であった。『失われた時を求めて』第一巻「スワン家の方へ」がベルナル・グラッセ書店から始めて出版されたのは、一九一三年の十一月十四日であったが、それに先立つ二日前、すなわち十一月十二日付のフランスの夕刊紙『ル・タン』の第二面に、「スワン家の方へ」に関するエリ・ジョゼフ・ボワ氏によるインタビュー」が発表された。その中で、ブルーストはこう語っているのである。

「……私の書物は『無意識（潜在意識）』の小説の連作の試みとも言えましよう。こう言って正しければ、はばかることなく『ベルグソンの小説』と申すべきでしょう。というのは、いかなる時代でも、文学というものは、当時を支配する哲学に——勿論あとから——結びつくべく努力した、という現象が見られるからです。」

ところで、我々がこの両者の影響関係を考察しようとする場合、初めにはつきりと念頭にかけおきたいことが一つある。それは、ベルグソンの思想がブルーストの作品に及ぼした影響は、たしかに

考えられるのであるが、ブルーストの作品がベルグソンの思想に及ぼした影響は、絶無であったと言ってよいことである。このことを心に置いて、この両者の関係を考える時、我々の好奇心を強く引くのは、ブルーストのなかにあるベルグソンのなるもの、両者の分岐点、ベルグソンのなかには見られないブルーストの独自性、等の諸問題であろう。これらの問題のうちの後の二つについて論究してみる余裕は、現在の我々にはない。従って、小論における我々の課題は、最初の点、すなわち、ブルーストの作品の中に見いだされるベルグソンのなるものについての若干の究明を試みてみることにあり、ということとをここで予め断って置きたいと思う。

2

マルセル・ブルーストが、大作『失われた時を求めて』の創作に着手したのは、一九〇七年頃であつたらしい、と言われている。故に、ブルーストがベルグソンから影響を受けたと思われるのは、主に、一九〇七年以前に発表されたベルグソンの著作からであつたと考えてよいと思う。一九〇七年以前のベルグソンの作品というと、彼の四大名著のうちの二つが上げられる。その一つは、一八八九年に発表された処女作の『時間と自由』であり、他の一つは、一八九六年に公刊された『物質と記憶』という著作である。そこでこれから我々は、この二つの著書に即しながら、当面の主題を追求して行くかと思ふ。

先ず、ブルーストはベルグソンの作品を実際に読んだことがあるのだろうか、という問題があるが、この点については、次のような

ブルースト自身の証言がある。

「私は、『創造的進化』は知りません。……でも、ベルグソンは、かなり読みました。」

この証言は、一九一〇年になされているから、ブルーストが、前述のベルグソンの二つの著作を読んでいたことはほぼ間違いないと断定して差支えないと思う。

さてそれでは、ベルグソンは、その著書においていかなる思想を展開させているのであろうか。彼が、あの『時間と自由』において研究対象としたのは、この作品の原題が示している通り、人間の「意識に直接与えられているもの」であつた訳だが、この対象を考察する際、彼は先ず、人間の意識が取る現実的な姿としての幾つかの状態、例えば、感覚であるとか、感情であるとか、感動であるとか普通のわれているものを個々に取り上げ、それぞれの強度ということについて省察を行なつた結果、それらの状態のいずれのうちにもある、量的でも数的でもない、質的な内的多様性のイマージュを発見する。それからさらに、この多様性が、その具体的な多様性において考察された後、意識の諸状態は、『時間の中に展開され、持続を構成する』と主張されるに到つて、彼の全哲学がそれに基づいていると言つてよいほどの、中核的な觀念が誕生するのであるが、ではその持続とは一体なにかというと、『われわれの内部の持続とは、数とは似てもつかぬ質的多様性であり、増大する量とはやはりちがう有機的發展であり、区々別々な質を含まない純粹の異質性である』と、その著書の最後のところでベルグソンは説明している。ごく簡単に言えば、この書物は、物質というものは明らかに人間の

外にあるものだが、そのような物質の世界のあり方とは全く異なつたあり方をしてゐるものとしての人間の直接意識の世界を、極度に緻密な分析によつてはじめて我々の前に開き示してみせた画期的な作品であつたと言えよう。

一方、ブルーストが、『失われた時を求めて』のなかで努めて描こうとした対象は、なんであつたのか。彼はその作品の中で例えば次のように書いてゐる。

「私はいつもこう思ふのだった……唯一の眞実の書をものにするためには、すでにその書物はわれわれのうちにあるのだからして、大作家は普通の意味で、それを発明する必要はない、ただそのうちなるものを引き出しさえすればよいのだ、と。思うに、作家の義務なり努力なりは、翻訳者の義務、努力にはかならない。」

ブルーストは、自己の作品に『失われた時を求めて』という題名を与えているが、彼にとって、彼自身の失われた時間、すなわち彼の全過去は、決して失われてしまつていたのではなく、実のところ、彼の内部に生き続けていたのである。その生きてゐる過去、それをブルーストは、右に引用した文中にもあるように、「うちなるもの」と言つたのである。そのうちなるもの、ブルーストの別の言葉で表現すると、『内的現実』を翻訳することが、小説家としての彼の至上唯一の義務であると彼には思われたのである。では、実際に彼の作品の中で表現されてゐる内的現実なるものを構成してゐるのは、いかなるものであつたのだろうか。——ブルーストの内的現実を構成してゐるもの、それは、彼の大作のどの巻を開いてみても

明らかな通り、ブルースト自身によつて恐らく現実を感じられ生きられ体験された、殆ど無数と言つてよい程に多様な、過去の、感覚や感情や感動や、なかならず、印象であつたと言えよう。

すでに解説したように、これらの要素こそ、ベルグソンがその処女作のなかで、考察の対象としたものに外ならないのである。ただここで注意して置きたいことは、ベルグソン自身は哲学者としてこれらの要素を、思考の対象にはしたが、それらの要素そのものを表現しようとしたらあるいは歌い上げたりしようとしたことは一度もなく、むしろそれを行つてきたのは、小説家であつたと彼は考へていたという点である。このことは次のようなベルグソンのことばから察せられるのである。

「誰か大胆な小説家が、巧みに織られた慣習的自我の幕を引き裂いて、この見かけの論理の下に根本的の非合理を見せてくれ、簡単な諸状態のこの並列の下に名を付けられるときには既に存在しなくなつてゐる無数の印象の限り無い滲透を見せてくれる場合には、我々自身よりも我々をよく知つてゐるとしてその小説家を讃めるのである。けれども決してそうではない。感情を等質的時間のうちに繰り上げ、その諸要素を語によつて表わすそのことによって、小説家も亦感情の影を提供するに過ぎない。ただ、この影を処理するのに、影を投ずる対象の異常且非論理的な性質を察せしめるようにした。外部的表現のうゑに、表現された諸要素の本質そのものをなすこの矛盾、この相互浸透の幾分を入れて置くことによって、我々を反省に誘つた。小説家に励まされて、我々はしばらく、意識と我々との間に置いた蔽いを取り去つた。小説

家は我々を、我々自身の面前につれもしたのである。⁽⁸⁾

我々は、小説家ブルーストが、その作品のなかで、刻苦しながら言語表現に移そうとしたもの、かつてあったがままに定着させることに骨身を削ったもの、それは、ベルグソンの右の文章中の言葉を借りて言えば、「無数の印象」と、感情の影ではなくて感情そのものであったということを重ねて述べておこう。

結局ここでは、我々は、ベルグソンがその最初の著作の中で思索の対象にしたものと、ブルーストがその小説の中で表現の対象にしたものとが、ほぼ同じ性質のものであったということと、小説家ブルーストに、このような表現の対象あるいは素材を発見させたものこそ、ベルグソンの『時間と自由』ではなかったか、ということとを主張してみたのである。

3

ブルーストは、自己の全過去を小説作品の中で再び生きてみることを企てた訳だが、換言すれば、ブルーストにとつての芸術作品のエッセンスとは、諸々の「印象の記憶による再創造」を意味していたのである。つまり、過去を現在の中に喚起させるためにブルーストが訴えたのは、記憶力という一能力にであった。彼とベルグソンとの関連を考察する時、必ずつき当るのは、この記憶力という問題に外ならない。多くの研究家がそうしたように、我々もまた、この問題に取り組まねばならないのである。

そこで先ずはじめに、ブルーストの記憶力についての考えに耳を傾けてみよう。前に一部を引用したインタビューの中で、彼は続けて次のように述べている。

「私の書物は……こう言って正しければ、はばかるところなく『ベルグソンの小説』と申すべきでしょう。……しかし、それは必ずしも正確にそうだとはいえません。というのは、私の作品は、無意識的記憶 (la mémoire involontaire) と意志的記憶 (la mémoire volontaire) との区別のうえに立っているからです。この区別は、ベルグソン哲学のなかにはないのみか、むしろ否定さえされています。私の考えによれば、意志的記憶は、特に理知による記憶、眼による記憶であって、過去からは、現実性のない面しか与えてくれません。ところが普通とは全く違った状況のなかで、再び見出された匂いや味が、われわれの内部に、意志によらずに、偶然過去をめざめさせてくれるとき、この過去が、われわれの思い出そうと思っていたもの、現実性のない色彩でかいた粗雑な画のように意志的記憶で描いたもの、そんなものからいかに違っているかを感じます」⁽¹⁰⁾

右のインタビューの内容から、ブルーストが、二種類の記憶を立てていたこと、さらには、その一方の無意識的記憶によつて蘇生する自我を小説作品の基礎となる素材とみなしていたことなどが明らかとなるが、しかし問題なのは、このインタビューの中で表明されているブルーストのベルグソン哲学に関する見解の正否である。結論から先に言えば、ブルーストのこの見解は間違っているのである。そのことをこれから証明してみようと思う。

ベルグソンは『時間と自由』を発表してから七年後の一八九六年に、第二の名著『物質と記憶』を公にした。この著作において取り組まれているのは、精神と物質との関係という、古くからあるフラ

ンス哲学上の問題であった。この問題に解決を与えるということ
は、この兩者すなわち精神と物質との関係を規定してみせることに
外ならないのだが、ベルグソンは、これを、記憶力という例を採用
することによって行ったのである。この例が選ばれた理由は、哲学
者自身の言によれば、記憶力の領域には、この古くからある「問題
の解決の適確な指示」⁽¹¹⁾を与える結果が見いだされると思われたから
であり、また、「記憶は、まさしく精神と物質の交錯点をあらわし
ている」⁽¹²⁾からであった。そうして、ベルグソンは本書において、心
身関係についての独特な論究を展開させるのであるが、ここで我々
が、この哲学者とブルーストとの関係という観点から、特に注目し
てみたいのは、記憶力についてベルグソンが行っている説明に、で
ある。

本書第二章の冒頭において、ベルグソンは、理論上互いに独立し
ている二つの記憶力を立てて、夫々を次のように説明している。第
一の記憶力について、ベルグソンは、「私たちの日常生活のすべて
の出来事を、それが展開するにつれて、記憶心像の形で記録するも
のであり、どんな些細なことでも洩らさないで、ひとつひとつの事
実や動作に、その位置と日付をあたえるだろう。損得や実用性を気
にする下心なしに、それは、ひたすら本性の命するところに従っ
て、過去を蓄積するであらう」⁽¹³⁾と説き、第二の記憶力について
は、「第一のものととは根本的に異なった記憶力であって、たえず行
動へ向かい現在に立脚し、ひたすら未来をめざすものである」⁽¹⁴⁾と
述べ、第一の記憶力を自発的記憶力 (la mémoire spontanée)⁽¹⁵⁾と
名づけ、第二のそれを、有意的記憶力 (la mémoire volontaire)⁽¹⁶⁾ま

たは活動的ないし運動的記憶力と呼んだ上で、「第一のそれこそ、
すぐれた意味で記憶力なのだ」⁽¹⁷⁾と結んでいる。

以上で明らかな通り、二種類の記憶力が否定されるどころか、明
確に区別されているのであるから、先に紹介したブルーストのベル
グソン哲学に関する見解は誤っていることになるのである。のみな
らず、むしろブルーストの記憶力に関する考えの方が、ベルグソン
のそれに酷似していると言う方が正しいと思う。だから例えば、
Romeo Arbour 氏が、「ブルーストの記憶力に関する諸々の意見は、
ベルグソンの文章の単なる書替えであるに過ぎないことが幾度ある
ことだろう」⁽¹⁸⁾と述べているのももっともだと言わねばならないで
あらう。もっと極端な発言を示せば、ブルーストが、その小説の中
で詳細に定着させようとした「あれらすべての、単純で感覚的な無
意識的記憶によって引き起こされる神秘的な啓示や、感動的に現出
される深い自我の蘇生は、習慣的機械的記憶力とは正反対のもので
ある自発的な生きている記憶力というベルグソンのテーマの、ヴ
ァリエーションに過ぎないのです」⁽¹⁹⁾という、Floris Deatrie 氏の
主張となるのである。

それ故、ブルースト自身があれほど独自性を強調したにも拘ら
ず、記憶力の理論に関しても、ベルグソンは、ブルーストの師であ
ったと、我々は結論する。

4

これまでのところで、我々は、小論において予定した考察を終え
たことになる。終りに、哲学者ベルグソンが、ブルーストの作品
や人間について行っている言及を三つほど列挙して置きたいと思

う。

最初は、ブルーストが「失われた時を求めて」の制作に着手する前の一九〇四年に出版したジョン・ラスキンの作品『アミアンの聖堂』の翻訳を、道徳・政治学アカデミーの会議において、ベルグソンが紹介した文章である。

「マルセル・ブルースト氏がさきごろ完成しましたラスキンの『アミアンの聖堂』の序文ならびに注を付した翻訳を、ここにマルセル・ブルースト氏にかわってわたくしからアカデミーに紹介させていただきます。その序文はラスキンの心理学に対する一つの重要な寄与であります。……マルセル・ブルースト氏はきわめて生氣のあるオリジナルな言葉に翻訳しておりますので、この訳書を読みながらも翻訳とは信じられないほどであります。付けられた注には、この『アミアンの聖堂』とこの作家の他の作品との間の数多くの比較照合がみられます。²⁰⁾」

ブルーストは、ラスキンからもかなり影響を受けていたようである。このことは例えば、Romeo Arbour 氏が、「ブルーストの天才が生まれ花咲くのを助けたのは、主としてラスキンとベルグソンであった。ラスキンは、ブルーストに、芸術の実在を見せ、ベルグソンは、内的生命の実在を見せたのである」と述べていることからも想像されるが、詳しい影響関係は、現在の我々にはよく分らないので、これ以上のことを言うのは差し控えなければならない。

第二は、一九三四年に公表された『思想と動くもの』の中に見られる次のような文章である。

「……内的生命に関しては、哲学はほとんどの場合表面に凝固

したものしか捉えてはいない……この方向では小説家やモラリストの方が哲学者よりはるかに前進していたのではなからうか。おそらく、そうだと言える。だが彼らはただ所々で、必要に迫られて障害を打破したのであり、「失われた時を求めて」方法的に進しようとした者はだれもいなかったのである」²²⁾

これは、ブルーストの、失われた時の探求への控目な讃辭と受け取るべきであろう。引用文中の、志した者は、という言葉の次に、ブルースト以前には、ということばを補えば、ベルグソンの言わんとしていたことが一層はつきりしてくると思う。

最後に、ベルグソンのブルースト観が最も明瞭に現われている資料を引用して置こう。かつてベルグソン友の協会の会長であったといわれる Floris Delattre 氏が、ある時ベルグソンと対談した際、彼に、あなたはブルーストをどう考えになりますか、と尋ねてみたことがあったそうである。問われたベルグソンは、ゆっくりとしたしかもはっきりした声で次のように語ったという。

「私は、ブルーストの心理分析の仮借ない洞察力と彼の文体の一定した豊かさには心から感服していますが、その人間と作品の全体とに対しては、不十分な共感しか感じておりません。△あの親愛なマルセル▽が若い時に身を投じた社交界の時流を追う環境が、消えることのない刻印を彼に押ししてしまったように思われます。『失われた時を求めて』の著者には、魂を高め元気づけないような、そしてまた、希望に対して門を開けたままにしておかないような、真に偉大な芸術作品は存在しないのだということが少しもわかっていなかったように私には思われます」²³⁾

以上、ベルグソン自身がブルーストに関して行っている言及の主なもののすべてを、小論の補足としてつけ加えて置いた。

付 記

小論は、一九六七年春、青山学院大学で開催された日本フランス語フランス文学会にてなされた研究発表に基づいて書かれたものである。

註

- (1) ブルースト著「スワンの恋」II 淀野隆三・井上究一郎両氏訳、三三三頁。
- (2) Proust : A la Recherche du Temps perdu (以後、R. T. P. と略す。) Pléiade, Tome I, p. XLI.
- (3) Lettre de 1910. Cf. Georges Lauris, "A un Ami" p. 205.
- (4) ヴルゲン著「時間と自由」平井啓之氏訳、二〇四—五頁。(Bergson : Oeuvres, P. U. F., p. 146).
- (5) 右同書二〇七頁。(Bergson : Oeuvres, P. U. F., p. 148).
- (6) ブルースト著「見出された時」II 淀野隆三氏訳、十一頁。(Proust : R. T. P., Pléiade, Tome III, p. 890).
- (7) ブルースト著「見出された時」I 井上究一郎氏訳、二八八頁。(Proust : R. T. P., Pléiade, Tome III, p. 882).
- (8) ヴルゲン著「時間と自由」服部紀氏訳、一二八頁。(Bergson : Oeuvres, P. U. F., p. 88—89).
- (9) ブルースト著「見出された時」II 淀野隆三氏訳、三三三頁。

- (10) Proust : R. T. P., Pléiade, Tome III, p. 1044).
- (11) ブルースト著「スワンの恋」II 淀野隆三・井上究一郎両氏訳、三三三—三三三頁。
- (12) ヴルゲン著「物質と記憶」田島節夫氏訳、九頁。(Bergson : Oeuvres, P. U. F., p. 164).
- (13) 右同書同頁。
- (14) 右同書、九五頁。(Bergson : Oeuvres, P. U. F., p. 227).
- (15) 右同書、九六頁。
- (16) (Bergson : Oeuvres, P. U. F., 227).
- (17) Bergson : Oeuvres, P. U. F., p. 229.
- (18) Ibid., p. 233.
- (19) ヴルゲン著「物質と記憶」田島節夫氏訳、九八頁。(Bergson : Oeuvres, P. U. F., p. 229).
- (20) Romeo Arbour : Henri Bergson et les Lettres françaises, p. 359.
- (21) Les études bergsoniennes, volume I, p. 88.
- (22) ヴルゲン著「小論集」花田圭介・加藤精司両氏訳、二九一—二九二頁。(Bergson : Écrits et Paroles, Tome I, p. 224).
- (23) Romeo Arbour : Henri Bergson et les Lettres françaises, p. 372.
- (24) ヴルゲン著「思想と動くもの」矢内原伊作氏訳、二九頁。Bergson : Oeuvres, p. 1268).
- (25) Les études bergsoniennes, volume I, p. 125—126.